

達人の旅指南①

フリーライター 加藤 隆悦

のんびりを楽しむ旅

旅をしようと思った時、僕たちは、まるでバッグにありったけのものを詰め込むように、どれだけ多くの思い出をつくれるか、その思い出の種類や数を数えてしまいたくなる。

たとえばバックツアーのバンフレットを見る時、立ち寄る場所が多ければ多いほど、なんとなく嬉しくなってしまう。それもまた人情ではあるけれども、ときには、心までからっぽになるような、のんびりを楽しむ旅を試みるのも面白いのではないだろうか。

十和田ホテル

そんなときに泊まる宿は、豪華さや過剰なほどのサービスを競う宿よりも、旅人にとつての本当の安らぎがどういうものであるかをよく知っている宿のほうがいい。

「お客様にできるだけ自由な時間を楽しんでいただくため、サービスを簡易にしています。ご要望の際はお気軽にお声掛けください」——こんなサービスコンセプトを掲げているのは、十和田湖畔にある十和田ホテル。このホテルなら、のんびりとした時間を過ごすという最高の贅沢を、味わうことができるはずだ。

みちのく ココロとカラダの癒し旅



本館館内は開業当時の趣を残していて
レトロな雰囲気には溢れている



十和田ホテルがそこに建つ意味

十和田湖はいうまでもなく東北を代表する観光地。四季を通して多くの旅人の旅情を癒してきた。

十和田湖観光の中心は湖畔の「休屋」地区にあつて、そこには多くの宿泊施設や土産物屋がひしめいているわけだが、その観光地特有の喧噪から一人孤高を保つように、休屋の対岸にあたる十和田湖西岸の外輪山の中腹に、十和田ホテルは建っている。

十和田ホテルがこの場所に建つに至った経緯がなかなか面白い。そして、実際にこの宿に泊まってみると、この場所であらなければならなかった「訳」がやがて分かってくるだろう。

このホテルの建物の威容には目を見張られる。ヨーロッパの山荘を思わせる巨大なログハウス風の外観には、樹齢百年あまりの天然秋田スギが惜しみなく使われ、内部には外国人客を意識した日本情緒溢れる意匠が随所に施されている。秋田、青森、岩手から八十人の宮大工が集められ、技を競わせたのだという。

風雪厳しい地に建つ十和田ホテルは、建築後五十年あまりを経てさすがに老朽化も進み、設備も陳腐化したことから、二年がかりの大規模な改修工事が行われ、平成十年にリニューアルオープンしたばかりだ。

生まれ変わった十和田ホテルは、文化財的価値のある本館を開業当時のままの姿で内外をリファインし、新たに洋室タイプの客室が並ぶ新館を設けて、和洋新旧、さまざまな味わいを楽しめる宿になった。

レトロな本館とモダンな新館に挟まれた中庭はタイムトリップ空間



東京オリンピックは1964年（昭和三十九年）の開催だったが、実はそれより古く昭和十五年にもオリンピックの東京開催が予定されていた。結局その年の大会は、国際情勢の急激な悪化のために幻になってしまったのだけれども、開催に向けて着々と準備が進められていた頃、日本政府は、オリンピックに合わせて世界中から訪れるであろう外国人観光客を想定して、全国の5カ所に新規の宿泊施設の建設を要請していた。そのうちのひとつが十和田ホテルというわけだ。

オリンピックが幻に終わったことと、その後には始まった第二次大戦などのために、昭和十四年の開業後も十和田ホテルは、経営の移管、休業、進駐軍の接収と、苦難の道を歩んできた。



バーラウンジ「花梨」。宿泊客はこういったパブリックスペースで自由に寛ぐことができる

エントランスホールの生け花はホテルスタッフの作品。旅人の心を和ませ、自然の息吹を感じさせてくれる



浴衣に着替えてゆったり
気分を満喫



湖に向けて一面ガラス張りの大浴場



宿泊客の寄贈した本が並ぶ
ライブラリー



いざ、のんびりステイへ！

十和田湖随一のビューポイント発荷
畔。そこから湖に向かって下っていくと、
突き当たったところが和井内。ほとん
どの車はここから右折して休屋方面
に向かうが、十和田ホテルはその逆、
和井内のT字路を左折した先の鉛山
という地区にある。曲がりくねった湖
岸の道は、頭上まで覆う鬱蒼とした
雑木林の中を進み、木漏れ日が眩し
く車の中に射し込んでくる。

十和田ホテルでは、営業主任の上田
孝史さんに出迎えていただいた。

宿の周辺の見どころを知りたいと思
うのは旅人の常だが、「特にこれといっ
たものはありません」と、上田さんは
あつさりと言う。

それでは宿泊客はどうして過ごし
ているのかと尋ねると、「宿の周りを散
策されたり読書をされたりしてのん
びりと過ごされております。私どもに
連泊されている間を使つて八甲田や奥
入瀬溪流に足をのばされる方もいらっ
しやいます」とのこと。ホテルとしても、
連泊のお客さんを想定して、四泊まで
は毎日違ったメニューの食事を出せる
用意があるそうだ。

館内には、数百冊の書籍が並ぶライ
ブラリーがある。宿泊客はその中から
好きな本を選んで、その場で読んだり
部屋に持ち帰って読むことができる。
「実は、ここにある本で、私どもが購入
したものは一冊もないんです」と、上
田さんが意外なことを言われた。これ
までに宿泊したお客さんが、旅の途中
で読み終わった本を置いていったり、旅
から帰ってからわざわざ送り届けてく
れたものばかりなのだそう。そう言
われて改めて書架を見回すと、漫画や



夕食は、おしゃべりを楽しみながら、のんびりと…



大浴場の入浴は夜は12時まで。朝は5時から。
十和田湖の日の出を眺めながらの朝風呂は最高の贅沢



すべての客室から十和田湖が眺望できる

TOWADA HOTEL



施設のご案内

- 収容人数／138名様
- 和室／19室 洋室／28室 特別室／3室
- ダイニング ●ティーラウンジ ●宴会場
- 茶室 ●ラウンジバー ●杜の図書館
- 会議室 ●大浴場 ●展望露天風呂
- 売店 ●駐車場完備

お一人様1泊2食付 12,000円(税別)

※ご夕食お子様料理は1泊2食付8,000円となります。和室に2～3名1室の場合はお一人様1,000円増しとなります。休前日は、3,000円増しとなります。



十和田八幡平国立公園

十和田ホテル

〒018-5511 秋田県鹿角郡小坂町十和田湖西湖畔
ご予約はTel.0176-75-1122 Fax.0176-75-1313

www.towada-hotel.com



十和田湖の美しさを堪能するためにこのホテルがあるといっても過言ではない



本でも読みながら、明日の早起きに備えて早めに休もう

経済書、歴史書など、これまでの十和田ホテルの投宿者がどんなものに興趣を感じていたか、それらの本から伝わってくるようで、微笑ましい気分になった。

そういえば、十和田ホテルの館内には、常連客がつくつて置いていったというオブジェや油絵などもさり気なく飾られていた。一度泊まってしまうと、このホテルのサポーターでいたいというような気分が生まれてくるのだろう。

一泊であれ連泊であれ、やはり食事は楽しみ。北東北の旬の素材を創作会席に仕上げたという夕食は、オリジナリティー溢れるボリューム満点のごちそう。こういう宿に泊まる時は、夕方まで少しお腹を空かせておいた方がいい。

客室は和室洋室お好みで選べばいいだろう。すべての部屋から十和田湖が眺められる。十和田ホテルに宿泊してよかったですと実感できる瞬間は、翌日の朝に訪れる。

早晩、客室に居ながらにして眺められる十和田湖の日の出は素晴らしい。ほとんど人工物の見当たらない視界の中で、湖に突き出た中山半島の向こ

うから、ゆつくりゆつくりと朝日が昇ってくる。金色に光る湖面。あるいは、快晴の日でなくとも、ベールに包まれるような朝靄の中の十和田湖。

十和田湖に見どころ多しといえども、十和田湖のこれほどの野生の美しさを堪能できる場所は他にない。開業当時このホテルの経営にあたった関直右衛門という人は、「十和田湖を一つの金屏風にたとえるならば、鉛山、和井内、発荷峠がそれを正面から眺める位置にあたる」と語っている。鉛山にある十和田ホテルは、まさにその金屏風を真正面に見据える地点に建てられたホテルだったのだ。

十和田湖は、僕たちにはなじみの深い観光地だ。何度も繰り返し訪れている人もいるだろう。しかし、もしあなたが十和田ホテルに泊まるチャンスに恵まれたら、あなたは、今までに見たこともない十和田湖を発見することができるだろう。

まあ、一人で行くよりは、誰か大切な人を誘っていくのがいい。少し気取って、「きみに見せたいものがある」とでも言って、誘ってみてはいかがだろうか。

(文・写真)かとうりゅうせい(秋田市)